〇昭和 30 年代の龍ケ崎・・・

日本は高度経済成長期の中で，テレビの普及は最大の娯楽となり，洗濯機・冷蔵庫・電気炊飯器の普及は，家事の時間を短くすることになりました。そして，少しずつ近代的な生活が実現されつつありました龍ケ崎市は，近隣に先駆けて市制を施行し，消防署，ごみ処理場などが設置され，工場誘致も始まり，中学校舎の新築工事なども行われ，都市としての整備が進められていました

〇子どもの情景・・・

あの頃，子どもたちは土の匂いのする道や草の香る空き地や水田を遊び場にして集まり，元気が溢れていました。

決して裕福ではなかったけれど，遊び道具を工夫し，大きい子は小さい子の面倒を見，年下の子は年上の子を慕い，自然そのものを遊び場として四季を学び，自ずと小さな社会ルールを覚えていきました。

写真の場所や子どもたちをを知らなくとも，懐かしさを感じさせる写真の数々は，明日を夢見る思いで過ごすことが多かったあの頃の自分や友達の姿が目に浮ぶことでしょう。

〇写真家　佐藤有さん

現在も市内で写真館を営みながら，㈳日本写真文化協会理事としてご活躍されている同氏が，当たり前に写した被写体も半世紀を経た今日，私たちの記憶から消えかけようとしています。こつこつと撮り続けてきた写真は，龍ケ崎の近現代史を知る上でも大変貴重な視覚資料となっています。

さらに，故郷の変わりようを捉えた写真の一枚一枚は，見る人に郷愁を呼び起こすことでしょう。

〇写真展「昭和３０年代の龍ケ崎・・・　子どもの情景」の開催にあたって

半世紀前からわが町「龍ケ崎」の変貌するもの，失われてゆく物に対して，こつこつとシャッターを切り続けた佐藤　有さんの写真は，「天地人」全てに愛情が感じられます。

今回は撮り溜めた写真の中から，昭和 30 年代の子どもの日常をテーマに写真展を開催いたします。

これらの写真からは当時のご近所同士，子ども同士の結びつきの深さを窺い知ることが出来ます。同じ時代を生きてこられた方々には懐かしく，若い世代の方々には当時の暮らしぶりを知る資料のひとつとして，幅広い世代の方々にご覧いただける展示内容となっております。

是非，皆様お誘い合わせの上，ご来館頂きますようご案内申し上げます。

財団法人龍ケ崎市文化振興事業団　理事長　藤後　茂男

〇相撲

大きい子も小さい子もいっしょになって遊んでいた。子どもだけの世界で、自然にルールがあって、ケンカをしても痛さを知り、限度を知り、優しさも知った。
昭和３２年（１９５７）

〇造成地で遊ぶ

昭和３５年に愛宕山を削り、愛宕中学校建設予定地の造成が始まった。
整地しているときの斜面で、子どもたちが遊んでいた。体を動かし、自然と共に工夫して遊んでいた。
昭和３６年（１９６１）

〇廃墟で遊ぶ

奈戸岡には、太平洋戦争前に軍事工場として、羽田精機の工場群が建っていた。
この町にも戦争の傷痕は残っていた。壁の穴は、戦時中に機銃掃射を受けた弾痕である。
戦後は、ＴＣＭ（東洋運搬機）の工場となり、現在は日立建機株式会社龍ケ崎工場となっている。
昭和３３年（１９５８）

〇ターザンごっこ

ターザンごっこは､荒縄を松の木に下げてターザンの真似をした。
木登りは皆が上手だったので､木の上に巣を作り、その中で遊んだりした。
松並木は､子どもたちにとって楽しい遊び場だった。
昭和３６年（１９６１）